
時忘れの祈り

つきよし凪桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時忘れの祈り

【著者名】

Z5396

【作者名】 つきよじ風桜

【あらすじ】

終わりゆく世界の中、生き続ける事を定めとされた、哀れな少年兵。その物語は、彼と同じ運命を辿る少女との出逢いにより……ゆっくり、ゆっくりと、その速度を落としていく。

プロローグ（前書き）

注意！

これから始まるのは、凄く悲しく暗い物語です。
明るさとは無縁なので、ご注意ください。

プロローグ

乾いた風に、頬を撫でられて。重い瞼を開けると。
ずっと。ずっと。恋焦がれていた蒼が。視界一杯に広がっていた
んだ。

嗚呼。

手を伸ばせば。あの蒼に。この穢れた手を、浸す事が出来そうだ
った。

届いてほしかつた。

もうじき、届くかもしれないなかつた。

俺は。きっともうすぐ。空だって、飛べるんだ。

この重い身体を、此処に残して。永遠といつ名の束縛から、解き
放たれて。

自由に、飛べる。何処へだって、行ける。

それなら。

それなら、最後に。あの子の所へ、行きたい。

行けるだらうか。

行つても、いいだらうか？

行つたら。

あの子は。いつも笑顔だつたあの子は。泣いてしまつだらうか。

……なら。

やつぱり、駄目だな。

田を閉じると。

熱い、熱い、水。雨が降つている訳でもないのに。
きつと、空から降つてきて。俺の頬を伝つた。

哀れで、穢きたなくて、只管に醜いこの世界を。
あの蒼空の向こう。高い、高い所から見下ろしている神様とやら
が、もし其処に、本当に居るのなら。

どうか聞いて欲しい。

俺の事なら、もういいから。十分だから。

せめて。あの子だけは。

ずっとずっと、笑顔のままで。

第一話

「俺、もう無理かもしねー」

彼がそう言い出したのは、兵士輸送車の中での事だった。

凸凹の多い道。かつては林道であつた其処も、最早荒廃した無の大地に過ぎない。

その無を抜け。赤と、更に深い空虚に染まる、戦場へと。無感情に走り続ける、車。

狭い空間に詰め込まれてゐるのは、一様の格好をした兵士達。その中に『彼』は居て……隣には、何時もの様に彼が居た。

厚い皮の、くすんだ色の鎧を纏つたその集団は。皆、既に死んでいるかのように押し黙つていた。

誰もが、終わる事の無い戦で。疲弊しきつっていた。

だから、その中で。彼がそんな消極的な事を口にしても、その場に満ちる沈黙は揺らぐ事は無かつた。

「もう、無理だ」

彼が、再度繰り返し紡ぐ。恐らくは、独り言だつたのだと思ひ。それでも。塞いでいた筈の聴覚を経て、『彼』に届いてしまつたから。

「……そんな事を言つて何になる」

『彼』は、低く、低く呟いた。そして繰り返す。

「そんな事言つて、何になるつて言つただ。無理だから、何だつて
言つんだ。……死ぬのか。今日」
「…………どうだらう

そう言つて。彼は、目を細め。微かに、口の端を、上げた。

彼は笑っていた。泣きだしたいのを、我慢しているようでもあつた。

しかし『彼』に、それは解らない。表情に変化が起きた、としか、『彼』には認識できなかつた。

「フレイ

彼の名を呼んで。それきり。

どうしたんだ、と。『彼』は、言つ事が出来なかつた。

その疑問を口にする前に。

フレイ＝クルーは、戦場に生きる者にとっては、あるまじき行為を取つたから。

「そうかもな。……死ぬ、か。……そうかも、知れないなあ

枯れた声で言つた彼の、乾いた皮膚を伝つ。揺れる鉄の床を濡らす、ほんの一筋の光。

そう。彼は涙を流した。

世界が終われば。それと一緒に、きっと自分も死ぬ事が出来るのだろうと、『彼』は思う。

昨日無抵抗に敵の刃に散つた……『フレイ＝クルー』という存在のようだ、と。

フレイと『彼』は違う存在だった。

同じ人間でありながら、違う存在。

個性とか存在意義とか、そういう事で区別しているのではない。自らと共に在る帝国が、世界で……崩壊を続ける世界で生き残つていく為に、終焉まで戦い続ける兵士であるという事以外に。彼等には個性も、存在意義も無いから。

それでも、違うところのは。

フレイには、限りがあつて。『彼』には、それが無かつた。そういう事だ。

皮肉なもんだ、と。

独り、家路を辿っていた『彼』は、厚い雲に覆われた夜天の下、立ち止まり。ある建物に向かい合つた。

教会。

……それが崇めている神様。
もし居るのなら、相當に意地が悪い奴だな、と。彼は思う。

世界が、壊れはじめて。終焉は間近に迫つていた。
それなのに。そんな時になつて、不死の者は生まれた。

かつての世界で、渴望された不死。

それが、実現された今は。羨望ではなく、哀れみの眼差しを向けられる対象となつてゐるのだから。

崩壊の間接的な原因は、戦争で。直接的な原因は、魔導兵器の使用。

世界の支配者となる為に、兵器開発を競つた名国。その急速な競争の中、生じた強大すぎる魔導兵器は、何時しか時空を歪めるまでに至り。

それを。ほんの一 度だけ。使用してしまつたばかりに。
時空の崩壊ははじまつた。一度崩れてしまつた均衡を元に戻す術
は無く。

軍事大国は残された土地を領有するために、以前に増して戦争を行つよくなつた。

『彼』の仕える帝国……グラシアも、その一つ。

愚かだ。『彼』は、知つてゐる。

そんな事をしても。罪なき人民の命を奪い、勢力を伸ばしても。
それは既に意味の無い事。

余計に終りを近づけるだけの事だ。

けれど。だからこそ、『彼』は帝国の為に戦おうと思つ。
この世界が滅んでくれる事を。心待ちにしているから。

宵の闇と、包帯の下に蹲る、肩の傷の痛みの中。『彼』は不意に
目を閉じ、風の音を聞いた。

『彼』の黒髪を柔らかに撫で、過ぎ去つていいく。涼やかで、何処
か乾いている風。嫌な感じのする風だ。

『彼』はそのまま、暫く、動かない。いつの間にか、彼の脳内で反響するのは、今此処に在る風の音ではなく。

彼の、声になっていた。

死ぬ、か。

そう、そうかも、知れないな。

「……フレイ」

何故、この名を。今。

……と。

「泣いてるの？」

その時。フレイの木霊が、高く綺麗な、少女の声にて、変わった。

泣く……そんな馬鹿な。

『彼』はそう思つ。しかし、声には出せぬ。ただ黙して、振り返る。

其処には、やはり一人の見知らぬ少女。

彼女は、白い少女だった。

腰のあたりまで伸びた、長い銀色の髪。

『彼』が雪というものを知っていたなら、そう形容したであろう

美しい肌。

白いワンピースを纏い。

そして、『彼』と同じ、灰色の瞳をしていた。

こいつも、そうなのか。

悟った『彼』が、まじまじと少女の姿を見詰めていると。

彼女は、柔らかく微笑み。

「良かった。君は、泣いてなかつた」

柔らかな聲音で、そう言つた。

第一話（後書き）

いつも、凪桜です。

……暗い話が書きたくなりました。というか、思いついてしまいました。

『『レールズリードの風』』という別の連載をメインに進めていきますので、此方はゆっくり更新になります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5396j/>

時忘れの祈り

2010年10月9日01時10分発行